

JISS

Summer 2005

アテネ五輪を終えて 新たな挑戦

センター長 笠原 一也

2代目センター長に就任して
早いもので3ヶ月を過ぎました。
その間、国立スポーツ科学セ
ンター（JISS）では業績評
価委員会や運営委員会が開催
され、関係者各位の協力のもと
に無事に平成17年度もスター
トができたのではないかと思
っています。

これから具体的にそれぞれの
プロジェクト等の事業を展開
するわけですが、アテネ五輪で
の日本選手団活躍の要因にJ
ISSの存在も大きかったと
評価されているように、JISS
は言うまでもなく我が国の
スポーツ科学・医学・情報の研
究拠点として、またミニトレ
ニングセンターとして、国際競
技力向上を支援していく施設
であり、日本のスポーツを強く
することが使命であるといえ
ます。

それ故、来年のトリノ冬季五
輪、3年後の2008年北京五
輪に向けての取り組みが今後
より重要であるといえます。

更には、JISS周辺に大規
模なナショナルトレーニング
センターが2007年末には
完成が予定されており、ますま
すJISSの存在とその果た
す役割が大きくなることが予
想されます。

今後は、「チームJISS」と
して部内の結束はもちろん、J
OCやNFとの連携協力のもと、
2008年の北京五輪に向け
てアテネを超える成果があげ
られるように、また2012年
の五輪はロンドンに決まった
ことでもあり、新たな挑戦が始
まったのであります。



トレーニング体育館



トレーニング体育館スタッフ



スタッフによる指導風景

【クローズアップ】

JISSトレーニング指導員

競技特性に合わせたプログラムで
トップアスリートの体づくりをサポート

エレベーターで4階に上がり正
面の扉を開くと、そこがトレーニ
ング体育館です。面積は724.5
m²、ブラットフォームは6箇所、ト
レーニングマシンは約60種類、専
任のスタッフが3名、指導補助スタッ
フ16名を擁する（平成17年7月現
在）、トップアスリートのための施
設です。

ここでは、トップアスリートの国
際競技力向上のために総合的な体
力向上を図ることを主目的として、
トレーニング専門のスタッフが競
技特性を考慮したトレーニングプ
ログラムの作成やトレーニング指
導を行っています。プログラムの作
成では、基本的なパワーアップはも
ちろんのこと、効率的なウオーミン
グアップの方法、ケガの予防や早期

復帰を目指したトレーニング、ボディ
バランスに優れた粘り強いブレ
イグができる体づくりなど、アスリート
やコーチからの要望にできるだけ
応えることに重点を置いています。
2004年度は延べ11209名
が体育館を利用し、個別にサポー
トを行った選手の多くがアテネオリ
ンピックの表彰台に立つてくれま
した。

また、トレーニングのサポートは
トレーニング体育館の外でも行っ
ています。競技団体の強化合宿先で
のトレーニングサポートをはじめ、
トレーニングに関するワークショップ
を実施しています。

これらのサポートを充実させる
ため、JISSの他の部門とも積極
的に情報交換を行っています。体づ
くりでは栄養を欠かすことはでき
ませんが、トレーニングの効果をも
最大限に引き出すために、栄養指導室
のスタッフと定期的にミーティン
グを行っています。また、リハビリ
テーション室との連携をとりなが
ら、積極的なサポートも行っています。
今後は情報研究部との連携のもと、
映像によるトレーニング情報公開
の検討を進めていく計画もあり、ト
レーニングサポートの更なる充実
を図っています。

平成17年度
「体育の日」中央記念行事／子どもの体力向上キャンペーン

元気アップ子どもスポーツフェスティバル

2005年10月10日 会場：国立スポーツ科学センター

主催：文部科学省・（財）日本体育協会・（独）日本スポーツ振興センター・（財）日本レクリエーション協会

詳しくは日本体育協会ホームページをご覧ください。 <http://www.japan-sports.or.jp/event/1010.html>

JISS支援でノウハウを蓄積 情報・科学委員会を設置する

■ JISSが4年前にできました。その立ち上げに際し、日本ハンドボール協会ではどのような期待を持たれていたのでしょうか？

もともと期待したのは現場の声が瞬時に反映される組織であってほしいということでした。JISSは我が国のスポーツの国際競技力の向上を目的としたスポーツ科学・医学・情報の中核機関です。ハンドボール協会ではJISS設立前もいくつかのサポートを受けたことがありましたが、なかなか満足のものではありませんでした。代表選手のメディカルチェックをお願いした際も細かいデータはいただけるのですが、それを受けて何をすべきが見えてこない。その点、JISSでは調査結果を受けてから、きめ細かいフィードバックがあり、何をすべきかが明確になりました。現場の目線に合わせた支援といえるでしょう。

■ 最初の支援は何でしたか？

最初の支援はゲーム分析でした。支援内容はJISSがゲーム分析を直接行なうのではなく、ハンドボール協会内に組織された分析班へのノウハウの提供でした。もともとハンドボール協会には強化部のなかに医・科学委員会があり、彼らのさらなるスキルアップが課題でした。

このニーズを満たしてくれたのがJISSでした。単にナショナルチームに対する支援だけではなく、ここから出てくる分析結果を次世代のナショナルチームにつなげるための示唆を生み出し、ナショナルトレーニングシステム（NTS）に還元するシステムが確立されました。その結果、2003年、2004年の活動を通して協会内では分析班の活動が広く認知され、2005年度からは情報・科学委員会としてその存在が位置づけられることになりました。

■ NFとJISSのもっとも望ましい関係とは何でしょうか？



日本代表チーム



JISS プロジェクト報告

progetto
プロジェクト
No.3

日本ハンドボール協会への サポート活動

(財)日本ハンドボール協会・蒲生強化本部長に聞く

「JISSを有効活用して 組織の充実を図る」



日本ハンドボール協会
強化本部長
蒲生晴明氏



映像分析によるサポート



JISS×HANDBALL

JISSのスタッフは人数が限られていますし、すべての競技について精通したスタッフがいるとは限りません。ナショナルチームに対するサポートを丸投げるに求めている団体もあるようですが、それでは真の発展は望めないでしょう。やはりNFレベルでJISSに対して何をサポートしてもらいたいのかを分析し、明確にしたのちに支援をお願いすることが組織の充実につながると思います。

ハンドボール協会では「協会がヒト・モノ・カネで自立する」ことを構造改革の目標のひとつとしています。そのなかには当然、サポートスタッフの自立も含まれます。さらに自立する努力をし、その中で不足する部分をJISSに支援してもらうというスタンスでなければ本当の意味での競技力向上はあり得ないと考えています。

おかげさまで2年間のJISSの支援を受け、情報・科学委員会を立ち上げることができ、ここが中心となってナショナルチームやNTSへの支援をする体制が整いました。

■ 現在の支援は？

初年度はゲーム分析に関する支援で、オリンピック予選における分析活動とここで得た成果をテクニカルレポートとしてまとめ、強化・育成にフィードバックしました。2年目はこれに加え、パフォーマンスを評価する部分にトライアル的に取り組みました。そして今年度はハンドボール選手の体力的要素に関する共同研究を開始しています。

ドッチボールとコラボレーション

目標は全国3000チームの少年団

■ ここ数年、協会でめざす一貫指導のシステムも定着してきているようです。

我々がとらえる一貫教育というのは一人の指導者が継続的に指導をするというのではなく、いつでもどこでも同じ内容の指導を受けられるという考えかたです。それには指導者が一体となり、具体的な指導方針のもとで運営していかなければならないと考えています。ハンドボール協会ではエリートスタッフ養成部会を設置し、次世代のハンドボール界を担う人材を育てるようにしています。NTS運営委員会、強化委員会、審判委員会、指導委員会のなかから若手指導者を選び、海外遠征などにも帯同してもらい、経験を積めるようにしています。団塊の世代がリタイアすると組織がバラバラになってしまうようでは健全な団体とは言えません。早期の人材育成は避けて通れない課題でした。

■ これからはユース世代の強化も求められますね。JISSの立場から見ると、さらにテクニカルを充実させるには専任のスタッフの充実が必要と感じますが？

テクニカルの充実は急務ですね。専任スタッフを分析部門に置くことで分析がマーケティングに発展していきます。そのようなスキルアップも重要と考えています。

今年度の競技力向上に関する事業の基本方針は「セッションを越えた協力体制で北京オリンピック出場」としています。北京オリンピック出場のための強化施策立案と同時に、日本ハンドボール協会の強化に関して「構造改革」を実施します。よってNTSをシステムとした「発掘・育成・強化・指導」について将来にわたりオリンピック・世界選手権に出場できる体制を構築していこうと取り組んでいます。

■ 普及ということではドッチボールとコラボレーションもしていると聞きましたが？

2010年にハンドボール人口をボールゲームの中で日本で3位にすることを目標にしています。それには小学生を中心とした地域ハンドボールチームの育成が不可欠となりますが、全国に3000のハンドボールチームをつくりたいと考えています。

小学校ではドッチボールが授業で取り入れられています。中学、高校には部活動としてハンドボール部があります。そのことからドッチボールが好きな子どもに似た要素を持つハンドボールに親しんでもらおうと考えました。

6月に世界ユース選手権アジア予選U-19壮行試合を行いました。その大会の一環としてドッチボール大会も壮行試合の前に行いました。この中から少しでもハンドボールに興味を持ってくればと考えています。